

## 株式会社 アプリシエイト 代表取締役社長 和田 幸哉 氏



写真提供：(株)アプリシエイト

水戸市に本社を置く株式会社アプリシエイトは、2011年3月に創業したIT企業です。経営の中心には「大家族主義」があり、人間として正しいことをする「フィロソフィ経営」と経営者意識を持った人財育成を目指す「アメンバー経営」の両輪を軸に事業を展開しています。

同社は、「日本の中小企業を救うことは、日本経済を救うことと同義なり」と考えており、中小企業が業務の効率化を図るためのシステムとして、初の自社製品となる「アイシリーズ」を発表しました。

将来、「『ITメーカー』アプリシエイト」と、世界中から称される企業になるため、「感謝報恩」を社是に邁進し続ける同社の取り組みを取材しました。

インタビュー日：2019年5月21日  
〔聞き手：筑波総研(株) 専務取締役 藤咲耕一〕  
〔文・写真：筑波総研(株) 研究員 富山かなえ〕

### 企業概要

茨城本社：茨城県水戸市三の丸1丁目1-3  
ステーションフロント水戸 6F / 7F  
東京本社：東京都台東区上野6丁目1-11 平岡ビル 9F  
創 業：2011年3月1日  
事業内容：ソフトウェア(オープン・組み込み系)・アプリケーション開発、ホームページ・映像制作、SNS販促、ITコンサルティング、ドローンによる空撮、プログラミング教室、IT周辺機器販売など  
従業員数：62名(正社員のみ)

和田社長のご略歴や人生の転機などについてお聞かせください。

### ■ 若手経営者に憧れ、大学を中退して起業

私は1977年に常陸太田市で生まれ、地元の小・中学校、高等学校を卒業しました。子どもの頃から「悪ガキ」と呼ばれ、先生方からは問題児として扱われることが多かったのですが、友達だけは大切にしてきました。

浪人を経て入学した大学にはほとんど通わず、両親が一生懸命働いて送ってくれた仕送りは、パチンコ代へ消えるという散々な日々の中で、私は半ば人生を諦めかけていました。

そんな時、ある経営セミナーに参加した際、若手経営者の姿に衝撃を受け、「俺もあの人のようになりたい!」と強く思うようになりました。

「思い立ったらすぐ行動」が信条の私は、自分に残っている可能性を信じ、20歳で大学を中退して美容関連商品を卸す個人事業を創めました。

しかし、3年目から業績は悪化し、ガソリン代が払えず、病院にすら行けないという絶望的な状況に追い込まれてしまいました。

「なんて情けないんだ…」と苦悩の日々が1年間続きました。しかし、「ここで終わらせない。自分自身を裏切りたくない」という想いが徐々に湧き上がり、遂に前を向いて歩き出しました。

### ■ 熱い想いで、IT企業に未経験で中途入社

当時の日本はITの黎明期で、私もその波に乗ろうと決意しました。そして、23歳の時に就職活動を行い、茨城に支店をもつ富士ソフト株式会社(本社：神奈川県横浜市)に入社しました。

同社の採用試験において、1度目は不合格でした。しかし、何としても諦めきれず、「どうしても入社したい」という熱い想いをぶつけたところ、2度目の面接が実現し、未経験ながらも中途での採用が実現しました。

しかし、入社後に配属された我孫子事業所で、大きな壁にぶつかってしまいました。それは、専門卒で3歳下の先輩社員に対して敬語を使うように指示されたことがきっかけでした。

私は「以前、経営者だった」というプライドが邪魔をして、その指示を受け入れることができず、社内で“浮いた存在”になってしまいました。

### ■ 「挨拶」でチャンスを掴み取る

周囲からの期待が薄れていく中、私は1つだけ貫き通してきたことがありました。それは、幼い頃から両親に教育され続けた「挨拶」でした。

毎日大きな声で挨拶する私を見て、“雲の上の存在”であった事業所のトップである部長から「あのうるさい奴は、誰だ?」と気に留められ、その後、面談することになりました。

面談で部長は、私に営業への異動を提案しました。その提案を聞いた私は、自分の経験を活かせる絶好のチャンスを逃したくないと考え、即座に「はい!」と返答しました。

その後、他の社員が「水を得た魚のようだ」と揶揄したほど、私はどんどん仕事に打ち込んでいきました。そして、日立オフィスの営業強化の課題が挙げられた際、私に白羽の矢が立ち、3年振りに茨城へと戻ることになりました。

### ■ 死も覚悟した試練を乗り越え、感謝の心で精進

日立事業所に着任後、新参者を理由に軽視され続けましたが、私は無我夢中で仕事に取り組みました。そして、2年目から3年連続で優秀部門賞を受賞、さらに最優秀営業社員として表彰され、周囲から認められるようになりました。

ところが、得意の絶頂にあった私に人生最大の試練が訪れました。「過信、慢心、驕り、傲慢」によって大切なものを見逃した報いとして、3ヶ月以上、拒食や不眠、悪夢、嘔吐などに襲われ、出口の見えない日々、死も覚悟しました。

そんな時、本屋で出会った『鏡の法則』(野口嘉則著)と『生き方』(稲盛和夫著)を読み、「感謝する心」の大切さに気づかされた私は涙が溢れました。そして、「自分は一度死んだ身。これからは、世のため人のために、自分を捨てて精進する」と決意したのです。



会議室には「感謝」と書かれた額が飾られている

## ■ 最年少部長として、数多くの実績を残す

その後、利他の心を持って過ごすと、不思議に運が開けていき、私は最年少の技術部長として古巣の我孫子事業所へ戻ることになりました。人事発表後、事務所では「あの和田が、部長になって帰ってくる」と、騒然としたと聞いています。

席に着いた私の心に、入社当時、私を無下に扱った先輩や上司に仕返ししたいという感情は全くありませんでした。それどころか、「彼らがいたからこそ、今の自分がある。社員の皆を幸せにしたい」と感謝の気持ちが込み上げてきました。

その後、3期連続で計画を達成し、37歳で事業部長に昇格しました。そして、39歳の年、信頼する仲間が日上市で立ち上げていた現在の会社の代表取締役社長に就任するため、これまで大変お世話になった会社を退職する決意をしました。

## ■ 御社の経営理念や経営の特色、事業内容や社会貢献活動についてお聞かせください。

### ■ 「大家族主義」を中心とした経営を実践

当社は、経営理念として「大家族の物心両面の幸福を追求すると同時に人類社会の進歩発展と地球再生に貢献すること」、経営方針として「強固な財務基盤と事業の多角化により、安定した経営と持続的な成長を目指す」と掲げています。

経営の中心には「大家族主義」があり、人間として正しいことをする「フィロソフィ経営」と経営者意識を持った人財育成を目指す「アメーバ経営」の両輪を軸に事業を展開しています。

また、当社は業務に関する判断基準・行動指針として「アプリシエイトフィロソフィ」を策定し、全社員が日々活用しています。



和やかな雰囲気にも包まれている職場の様子

## ■ 次代を先読みし、定年制度を撤廃

当社の業務は、ソフトウェア(オープン・組み込み系)やアプリケーションの開発が9割を占めています。そのほか、お客さまの営業支援事業として、ホームページや映像制作、SNS販促、ドローンによる空撮なども展開しています。

当社がホームページをお手伝いさせていただいたお客さまからは、「問い合わせが増えすぎて困っている」と嬉しい悲鳴が届いています。



ドローンで常陸太田市内を空撮・編集した動画を説明する照沼常務(右)と森グループ長(左)

事業所は茨城と東京に本社機能を置くほか、新たに群馬にもオフィスを開設しました。社員は62名在籍し、平均年齢は30歳と若い人財に恵まれています。

また、当社は、定年制度を設けておらず、現在の最高齢は76歳です。社員がいつまでも自分の能力を発揮できる環境を整えていくことは、今後、企業が成長していくために欠かせない要素であると考えています。

### ■ 「日本の中小企業を救う」 = 「日本経済を救う」

「平成26年経済センサス」によると、日本の中小企業数は約380万で、全企業数の約99.6%を占めています。私は「日本の中小企業を救うことは、日本経済を救うことと同義なり」と考えています。

また、他の経営者の方にお話を伺うと、「社員がいつも忙しいと言っているが、誰がどんな仕事をどのくらいの時間をかけてしているのか把握できない」という意見が多く聞かれます。

そこで当社は、中小企業が業務の見える化、効率化を図るためのシステムとして、初の自社製品となる「アイシリーズ」を発表しました。この開発は、下請け体質から脱却し、ITメーカーとして第一歩を踏み出すきっかけにもなっています。

【「経営の見える化」で企業の繁栄に貢献

「アイシリーズ」は、業務の見える化を図る勤怠管理システム「iTime」や移動式の入退室管理システム「iEnter」のほか、現在、案件ごとに損益が一覧で見える「iPMS」も開発中です(下図参照)。

アイシリーズを活用すると、各プロジェクトの損益管理が瞬時に把握できるため、経営者はリアルタイムに経営判断をすることができます。これにより「経営の見える化」が図られ、企業の収益改善につながり企業の繁栄に貢献できます。

また、昨今問題となっている過労死の未然防止策になるとともに、従業員が予実管理を徹底することで、自身の働き方改革に向けた意識改善につながり、「社員の物心両面の幸福」を増やす効果なども期待することができます。



「アイシリーズ」の特徴 (画像提供：(株)アプリシエイト)

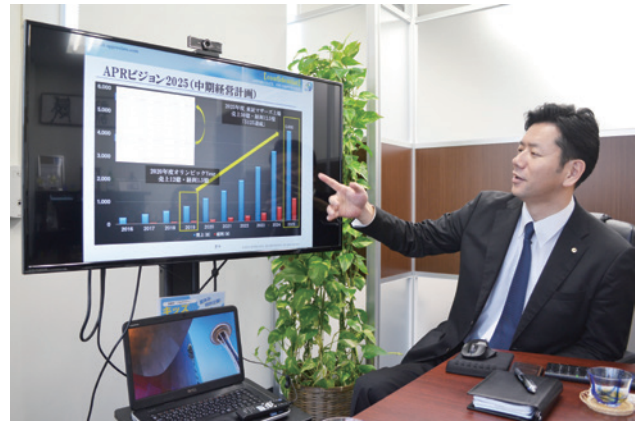
【茨城を「eスポーツ」の聖地に昇華

当社は「いきいき茨城ゆめ国体・いきいき茨城ゆめ大会」文化プログラムで初めての事業となる「全国都道府県対抗eスポーツ選手権 2019 IBARAKI」の企画・運営に携わっています。

eスポーツとは、「エレクトロニック・スポーツ (electronic sports)」の略で、対戦ゲームをスポーツとして解釈したものです。

2019年8月4日、当社は、「水戸黄門まつり」で盛り上がる水戸駅南口のビル「水戸オーパ-OPA」の壁面を利用し、県代表戦の様子をプロジェクションマッピングで投影する予定です。

この事業には、私の中学時代の同級生で、一青窈の「ハナミズキ」を作曲したマシコタツロウ氏にもご協力いただいています。この取り組みを機に茨城を「eスポーツ」の聖地として昇華させ、地域を盛り上げていきたいと考えています。



今後の事業戦略を語る和田社長

今後の事業戦略についてお聞かせください。

【世界に冠たる「ITメーカー」を目指す

私は、今年3月の事業計画発表会で、全社員に向けて、2026年に当社を東証マザーズに上場させ、世界に冠たる「ITメーカー」へと成長することを目指すと宣言しました。

私は「思いは必ず実現する」、「夢は必ず実現できる」と本気で信じています。そして、社長の仕事は「皆が幸福になれる美しい夢を描き、その夢に向かって全社員の力を同じ方向に集結させ、何倍もの力を引き出し、驚くような成果を生み出すことである」と考えています。

将来、「『ITメーカー』アプリシエイト」と、世界中から称される企業になるため、自社の発展に留まらず、人類社会への貢献という広い視点を常に念頭に置き、「感謝する心」を胸に刻みながら精進し続けて参ります。

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただきまして、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。



和田代表取締役社長(前列中央)、照沼常務(前列左)、岸グループ長(前列右) 多賀支店 勝村支店長(左)と聞き手・藤咲耕一